阿蘇

岩波写真文庫　75

阿蘇
75

岩波写眞文庫 75 阿　蘇

編　集　岩波書店編集部
監　修　北田正三
写　眞　西日本新聞社　岩波映画製作所

地図は、われわれが一目ではとらえられぬ廣い範囲の地形を、一枚の紙に投影して教えてくれる。うらみをいえば、慣れるまでそれが立体的に見えぬことである。しかし、山を登る一つの樂しみは、一つ一つの地形を地図に照し合わせ、自分の印象を地図の中に記憶しておくことであろう。その上で地図をよくよみこなすと、大自然の造型の偉大さを思い、一見異った地形にも同じ自然法則から由來した必然を見ることがある。われわれはそのような樂しみを阿蘇において試みた。ここはカルデラ地形をじつに典型的に残し、さらにいろいろな火山の形をとりそろえて展示している処である。われわれは、熊本縣観光課、産交バス会社、地元の人々の好意をうけ、初夏の頃、音に聞えたその廣い地域を、地図をひもどきながら、すみずみまで踏破した。

目　次

定価100円　1952年10月10日第1刷発行 1957年9月20日第6刷発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ッ橋2ノ3 株式会社岩波書店

前（舞）木下とよぶ大榎木，阿蘇神社北側にあり，昔の里程標木の起点．ここはまた松葉ヵ関ともいい，謡曲高砂にでてくる阿蘇の神主にちなんだ関所の跡である．

一 阿蘇地形

阿蘇という名　九州の中心にあって、たえず噴煙を吐き、火山灰を吹きちらす火山。そのたくましい階調に惹かれてきた先住民は、古代にはその山を「不知火火」とよび、中世には「阿蘇口」と称えた。火の音は、穴の國という意味であり、阿蘇はアソオマイで、燃える火のある処、または火の山という事である。阿蘇をはじめ、浅間、吾妻などの山名にみられる、アとかソ、マとかラという音は、もともと尊崇と驚異の意を表わしており、阿蘇山は、この地を拓かれた阿蘇大神が、一切衆生の罪に代わって燒かれ給う炎だと思われていた。したがって、昔から阿蘇詣りといえば、結婚前の男女などが、神に夫婦の結縁を誓う禊を行うために、煙を吐いている一峯、中岳をめざしたものであった。こうした火口に対する尊崇の念は、中岳を阿蘇の象徴ときめてきたが信仰の影が薄れ、山そのものを愛するようになった現在でも、依然としてその点には変わりがないようである。一年数百万のツーリストは、投身者への好奇心をひそかに抱きながら噴火口見物だけをすまし、それで阿蘇を観光したつもりでいる。しかし、阿蘇を火山として眺めるとき、われわれの場はさらに拡張されるだろう。中岳を中心として連なり、いわゆる阿蘇五岳に代表される山々は、今でこそ活動はしていないが、かつてはやはり「中岳」であった火山の集團である。さらに廣く五岳をとりまき三六〇度に見まわせる外輪山こそは、五岳のできる遥か以前にこの地に噴出した阿蘇の前身が残した裾野の一部だという。そして五岳と外輪山との間に廣くよこたわっている凹地は、その大火山の中心部が陥没してできた大火口原だという。阿蘇の「燃える火」は人間が生まれた歴史を遥かにさかのぼって、たえず活動しつづけ、中岳の噴煙は、いわばその長い火山活動の最近の余燼でしかない。

外輪山の東北部にあたる，妻子ヵ鼻　撮影場所は小堀牧の植林地帶．

高岳は鷲ヵ峯連峯の稜線に，中岳の噴煙．撮影場所は火尾峠の北麓．

外輪山の歴史　三〇万年前ともいわれる昔のこと、南の九州山脈と北の筑紫山脈との間に、阿蘇水道という帯状の低地が横わっていた。その地殻の弱い処に、鶴見、由布、久住、阿蘇、金峯、温仙など、いわゆる阿蘇火山脈の山々が噴起した。その中央部にあった阿蘇の前身は、富士山にも劣らないほどのアスピーデの高山で、その噴出物は、今なお南外輪一帯に残っている集塊岩であるらしい。それから後もしばらく、熔岩や集塊岩を噴きだして、山体の高さはいちじるしく増したようであるが、多少の時日を経過したとき、火口からは泥流と熔岩との大噴出をみた。しかもそれは、遠く博多、別府にも延び、九州東北一帯をおおうほどの莫大な量であったので、地下には大きな空洞を生じた。加えて地上には、なお噴出物が堆積を続けたので、ついには大空洞の天井を支えていた岩磐は、その重みに堪えきれなくなり、裾野のごく一部を残して大半が陥落した。

上より阿蘇地形図，同模型，カルメ焼．熔岩は多量のガスを含んでいるが一時に多量に流れだすとガスは放散されずに内部にたまり，冷えるにつれて大空洞を生じ，ついに地皮は陥没する．これは重曹を多量に入れて急にふくらましたカルメ焼が陥没する現象に似ている．

阿蘇五岳の東端に位する根子(猫)岳．撮影場所はヨコゾの植林地帯．

五岳の歴史　阿蘇に起った大陥落によって、現在の阿蘇の外廓の形が造られた。陥没の跡は、現在カルデラとよばれる火口原であり、それをとりまいている裾野の残骸が今の外輪山である。その延長一二〇粁、標高八〇〇－一、二〇〇米の外輪山楕円は、内側は陥落の跡を示して急峻であるが、外側は裾野そのままに平均五〇分の一のゆるやかな勾配を残した。しかしなお地下の噴出活力は、これら旧阿蘇の残骸の内で、鬱勃として蠢動を続け、火口原底をつき、ついには東西および南北に走る二つの裂線を生じ、まずその交叉点から猛烈な噴出をみせた。その結果できた山が今の烏帽子岳（一、三三七）であるが、これをきっかけに南北裂線上に杵島岳（一、三二一）、往生岳（一、二三八）、その寄生火山である米塚と蛇ノ尾、次にオカマド山（一、一五三）、夜峯が噴出し、ついで、東西裂線上に根子岳（一、四三三）、高岳（一、五九二）がつぎつぎと噴出し、さいごに中岳

(現在の中岳を中心とする阿蘇を小阿蘇，大昔の外輪山を含めた阿蘇を大阿蘇とよびたい)．

（一、五〇〇）が現在にいたるまでなおその余勢をもらしつつ、五岳と称せられる一群となって、カルデラを北の阿蘇谷と南の南郷谷とに二分した。こうして現在の阿蘇の原型がほぼ造られたわけであるが、地形の変貌はさらにつづく。

火口原から火口湖へ　カルデラの中に噴起した中央火口丘群は、多くの噴出物をはきつづけたが、その一部はカルデラ内にも堆積した。その後カルデラは、一時大きな湖となり、五岳は島と化し、外輪の鼻は岬となって浮いていたようである。すでにカルデラに積もっていた堆積物は湖の底に沈んだが、それは現在、火山灰やラピリの累層として残り、その間に礫層を水平にはさんでいる。一方、カルデラ底そのものは標高四〇〇－六〇〇米であるが、東から西にむかって、しだいに低く造られている。やがて火口湖の水は、この傾斜に沿って流れくだり、外輪山の西側に出口をみつけて、ついにはまったく湖水を干すにいたった。

↑ 米塚．全山スコリアとラピリの堆積．径30 m，深さ10 m の火口．中央の線は村境の堤．

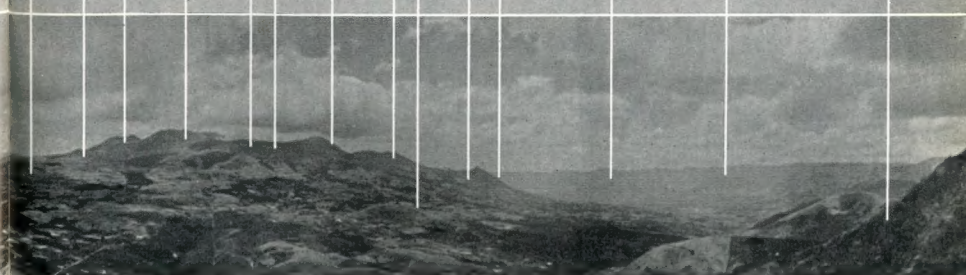
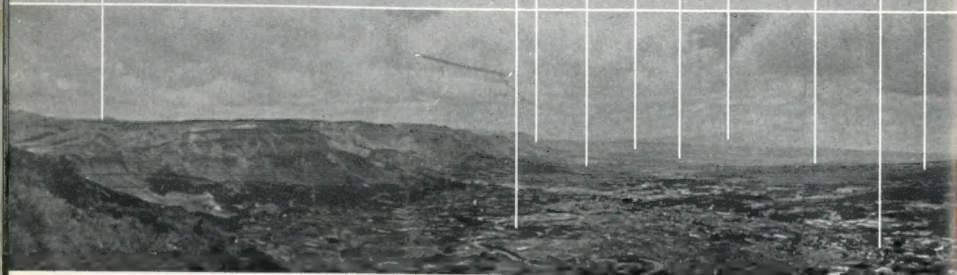
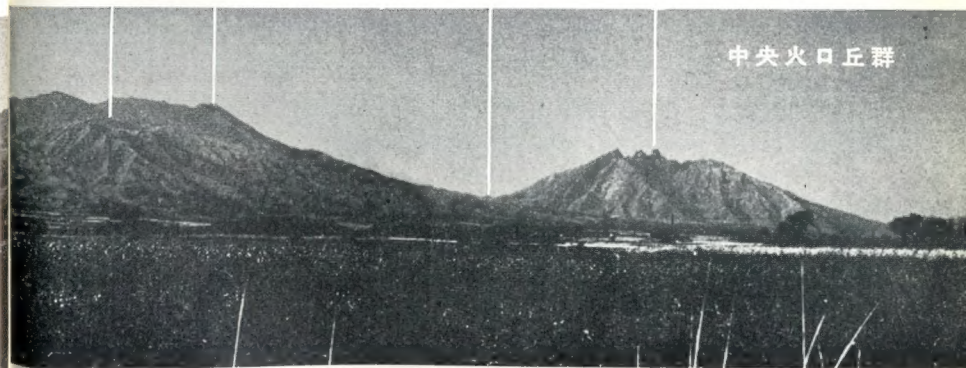
火口湖から火口原へ　現在カルデラの西に二つの低所がある。一つは二重峠であるがこれはカルデラができる前の阿蘇山が造った浸蝕谷、または輻射谷の跡らしい。いま一つの二重峠の南にあり一般に火口瀬とよばれる立野火口瀬でここが火口湖の水のはけ口と考えられる。阿蘇谷の水は黒川となり南郷谷の水は白川となり、立野で湊合して水勢がはげしく地盤をうがち、ついに火口壁を破って流出したわけである。その両岸は断崖絶壁となり、北側外輪の高さは、現在七五七米、南は七九七米、その間の幅二九五米、典型的なV字谷を形造った。しかし、こうして一度開かれた火口瀬は、その後に流出した中央火口丘の熔岩のために閉塞され両谷の水はいっしょになって立野の西方で滝をかけた。さらにこの滝は川底の浸蝕が進むにつれて、後退に後退、ついに火口瀬の処で二分し、おのおのさらに退却を続け、現在の数鹿流滝、鮎返滝となったと思われる。

↑ 眞下に中岳．その向う，左より杵島，往生岳．火口原，外輪山を越して筑紫山脈の遠望．

阿蘇をどう見るか　こうして長い間続けられた火山活動の歴史は阿蘇のとりとめない廣さを表現したが、またその廣さの内に、火山活動の各段階の痕跡を典型的によく残した。外輪山の内側には、総計七〇余の旧火口が、さまざまな火山形のモデル集團を形造っている。しかも、これらをよく注意してみると共通したあるスタイルが見出されて面白い。たとえば、外輪山と火口原と中央火口丘とからなる全形は、中央火口丘中の一峯草千里に小さく再現されているし草千里火口丘の形は、中岳火口底の火口丘そのものである。また雨水が中岳外輪山を破って流れ出す潮江谷は、立野火口瀬を形造った或る機構を想像させる。しかし、それはなにもふしぎなことではないかもしれぬ。外輪山も、カルデラ内に展示されている火山形のモデルも、おのおのの規模の違いこそあれ、火山地形を生み出してゆく火山活動の一貫した法則に統一されているのではないだろうか。

↑中岳 1,500m 最高点から火口南西部を俯瞰．背景に南外輪山．遠望は九州山脈，五家荘．

↓阿蘇外輪山とカルデラと中央火口丘群．西北外輪上，瀬田裏高地（二重峠のやや西）より．

▲ オカマド山．烏帽子岳頂上より．直径約 800 m，深さ 1,000 m の火口は東に向く馬蹄形．

▼阿蘇五岳の南面．高森町郊外より．いずれも山頂をとばされたコニーデ型のシルエット．

↑草千里火口をとりまく廓壁は，北方は欠損し，東南部に屹立する尖峯，，これが烏帽子岳.

↓左端の鼻は大観峯．右端の彎入は手野．その左を扼する鼻は象ヵ鼻．遠望に久住の連峯．

↑草千里．杵島岳中腹より．直径 1,000 m に近い大火口跡．中央にS字に北を向く火口丘.

↓北側外輪山．一様に切り立つ外輪内壁．平坦に連なる稜線．カルデラ陥没の痕跡を示す.

↑ 五岳(根子岳東頂上)より，波野高原を経て，久住山．右手の山は，豊肥の境をなす荻岳．

↓ 東外輪の外は勾配0に近い波野高原．久住を左に，遠く豊後竹田町に達す．鼻は妻子ヵ鼻．

外輪山 (外側の斜面)

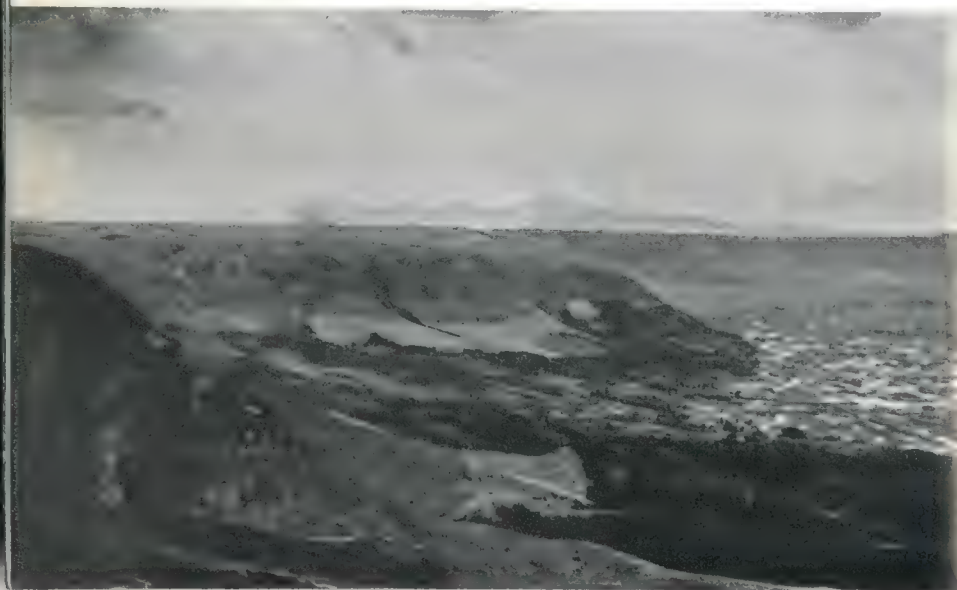
↑ 久住山麓(瀬ノ本) より，波野高原を経て，五岳．点々とあるのは茅を刈りとった小積み．

↓ 波野高原は，かつて大円錐形だった阿蘇山が，頭部に大陥没を起したとき残された裾野．

↑南郷谷(東部，クリカラ谷より．右手前の尾根はオカマド山)．阿蘇谷より狭く，海抜は西端長陽村で340 m，東端色見村で700 m．白川はむしろ急流．南外輪は阿蘇熔岩の大部分がはげ，集塊岩(初めて阿蘇が地殻を破ったとき噴いた土砂)を露出してジグザグ形．

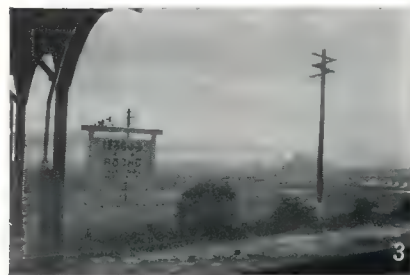
↓阿蘇谷(北部，大観峯の高地より)．海抜は西端永水村で 460 m，東端坂梨村で 540 m．大部分は 500 m 内外できわめて平坦．一部に濕地．黒川は蛇行多く，洪水が立野火口瀬に達するまでには，白川より約1時間遅れる．北外輪は阿蘇熔岩を主体とし均整な棚狀．

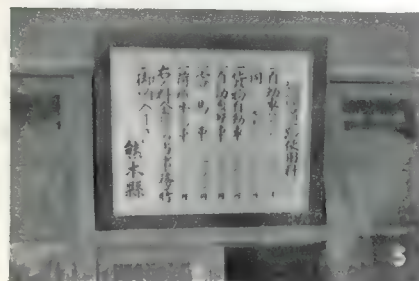
立　野　火　口　瀬

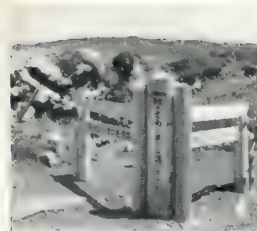
① 外輪山の西方にあく火口瀬のV字谷．正面に金峯山，熊本平野は白川の堆積平野．遠く有明海．
② 火口瀬南壁，原始林は深葉とここにしかない．
③ 南部谷白川は火口瀬に入る手前で，鮎返滝をかける．附近に栃木温泉．
④ 火口瀬は阿蘇の西口．V字谷の正面に阿蘇五岳．

傳説にいう，むかし阿蘇大神が当時の大火口湖干拓を思い立たれ，外輪の一角，二重峠をけとばしたが，二重なので破れぬ．そこで立野火口瀬の所をけやぶって湖水を干した．いま鯰村とよばれる土地は，その時に湖水の主だった大鯰が漂着した所といい，またくだんの鯰を料理したら六荷あったので，そこを六嘉村という．

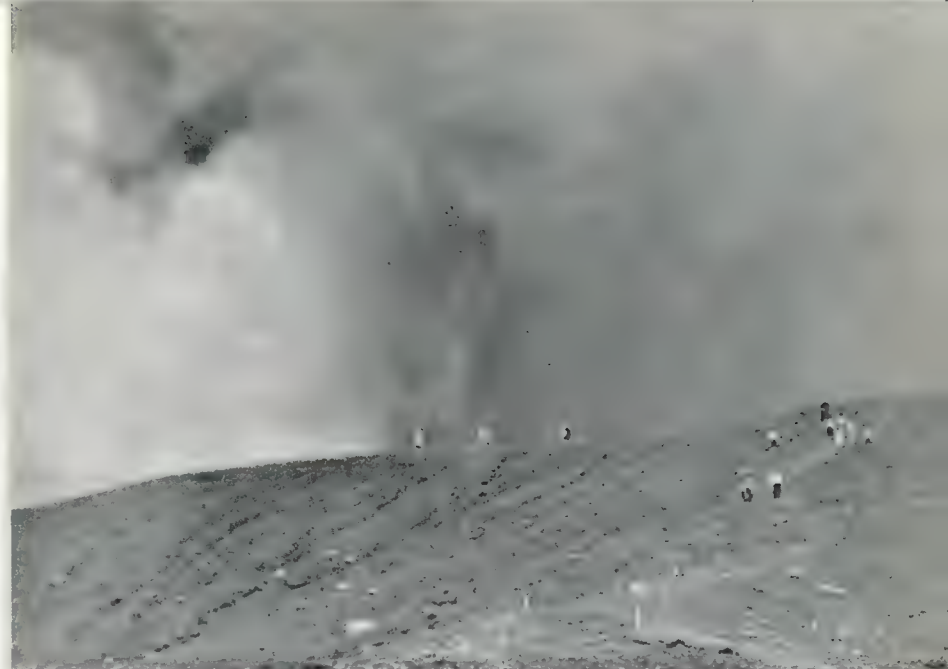
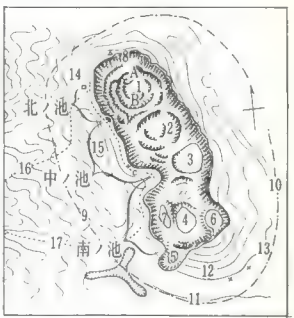
二　阿蘇登山

阿蘇カルデラに入る道は、豊後の別府から豊肥線を西へ上ってもよいし、豊前日田からバスで北外輪の長倉坂を越え、日向延岡から高森峠を越えるのもよいが、肥後の熊本から東へ豊肥線でゆくのが正面の入口である。汽車は、阿蘇をはるかに望む三里木駅の近くで、樹齢三百年以上という杉並木の間を走る②。

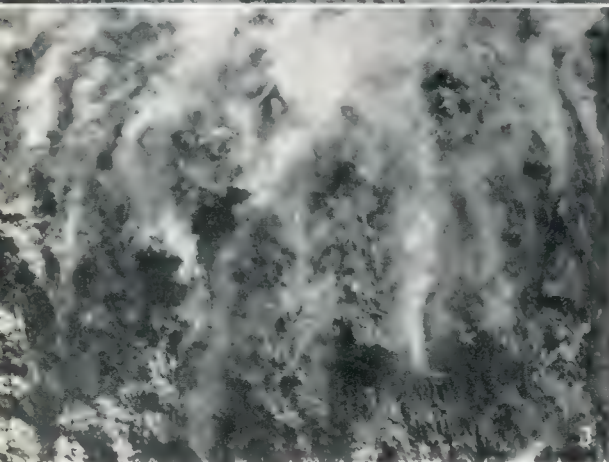
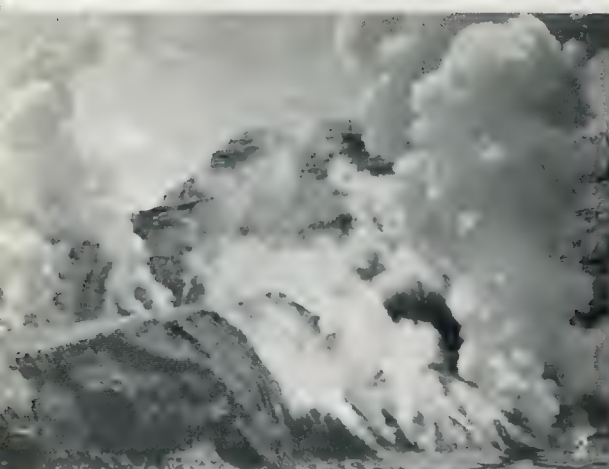
ここは細川侯参勤交代の御成道で、熊本から阿蘇まで十二里木ある道しるべの杉並木である。立野駅で汽車は高森支線と分かれ、火口瀬をスイッチバックしながら噴煙を正面にして上ると右手の丘に火山研究所を望見する①。数鹿流滝の音を右下にトンネル一つぬけると、阿蘇谷は廣々とした美田で、黒川が北外輪の裾を洗っている。坊中駅③で汽車を捨てれば、ここからは

昭和六年開通の専用道路⑤九マイル半を登山バスが上る④。案内ガールの名調子に右を見、左を見、往生、杵島岳の斜面を縫って草千里を過ぎ山上本堂につく。下駄で、ハイヒールでガラガラの熔岩地帯を上り、噴煙をのぞいて同じバスで下れば、まず二時間、手軽な登山である。こんな簡単な火口見物は世界でもまれだろうが、國際観光ルート唯一の鉄道だといってもガタ

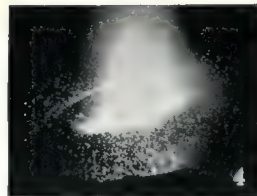
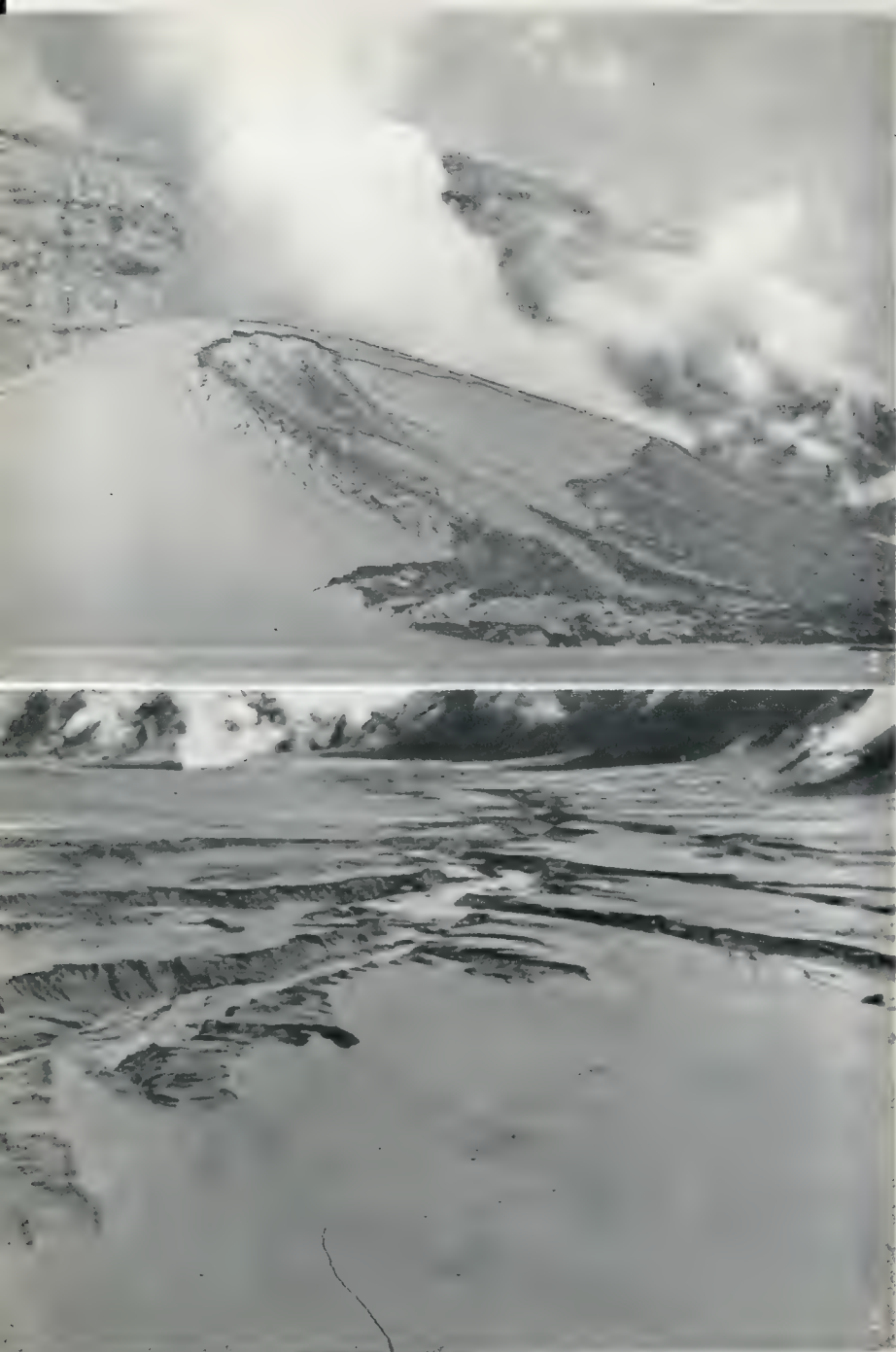
汽車で、道路もけっしてよくはない。観光の名で景色を経済化しようという風潮から逃れて、ほんとうにレクリエーションを楽しもうとするなら、徒歩の登山の方がよいかもしれぬ。汽車の各駅から五岳の斜面を上る旧道を歩み、ときに五岳の一峯一峯から外輪の岩屏風を眺める。しかもなお阿蘇の風景は、長く阿蘇に住まなければ理解できないほどのとりとめなさである。

三合目③．旧道がバス道を横切る①．ふりかえった阿蘇谷に火口丘のようなニエ(エベ)塚．さらに屈曲数回，杵島の切通しにかかる．眼前に中岳噴煙が天に冲して雲をよぶ②．

切通しをぬけた車は草千里の北道を走る①．両側の松林は25年ほどの植林というが，噴煙の故か，いっこう太っていない．道はダラダラ下りで古坊中の荒野にでる②．古い五輪塔．烏が弁当殻をつついている．昔ここには，三十六坊，五十三庵の霊刹があった③．

お 池 ま い り

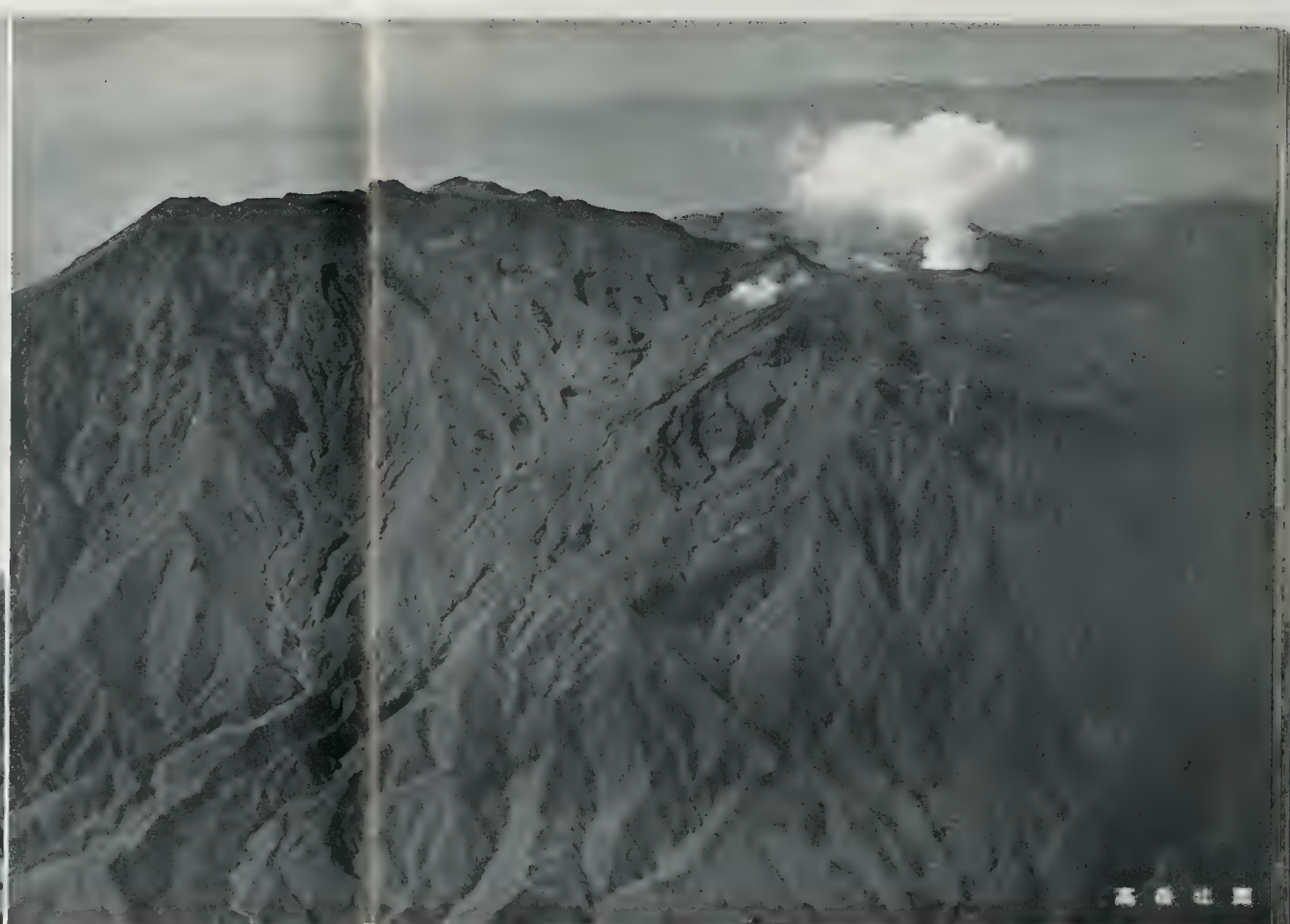
登山バスは拜所の終点につく①．阿蘇神社攝社と西巖殿寺奥院が神佛混合の両対象をなし，附近に火山観測所もある．ここから火口までは徒歩半時間の往復②．活動の盛んな時は風の方向を見，火山灰を避けて右か左の道をえらぶ④．何れにせよ勅使ヵ原をはさんで火口壁上にでる．左方の上りつめた眞直下に，活動中の第一火口を見くだす③．鼻をつく亞硫酸ガス．火口はお池ともいい，阿蘇の開祖タケイワタツノ命，義母ヒメミコノ神，嫡孫ヒコミコノ神三体になぞらえる．附近にはあいかわらず写眞屋が待ちうけ厄よけのカワラケ投げが客をよぶ．火口壁を一周して約１里⑤．やわらかい火山灰に雨水が谷をうがち⑥，東半の水は中岳火口瀬潮江谷よりクリカラ谷に落ち白川に合する．

中岳噴火口は深さ一二五米、長さ一、〇〇〇米、幅四〇〇米、南東から北西に、くびれたヒョウタン型、昔は南ノ池、中ノ池、北ノ池と三分したが、現在は七つの火孔に分けられている。その深さは第1が八六米、第2は七四米、第3は五一米、第4は一三一米、第5は五米、第6は一〇米、第7は五八米で歴史的に調べると南北の火孔が交互に活動しているもようである。明治中期には北部が動き、大正初期には南部、昭和初期にはまた北部、現在では第1火孔Aが活動している。火口全体の形は安定していて、猛烈な噴火を起しても、その内の一部の火孔が火山灰を四散、熔岩を流出するだけで、浅間や盤梯のように別の口を見つけて爆発し、山体を飛ばすようなことはない。時には火口底に水がたまり、火口は熱泥のように沸騰して数年間つづくこともあるが、噴煙が止まるわけではない。静穏時にもたえず火山灰か水蒸氣を噴出しており、活動を止めないのが中岳火口の特長でもある。一年を通じて活動の盛んなのは秋から冬にかけてであり、一日中でいえば、正午前後各二時間の頃に噴煙が多い。雨が降った後にも多量の火山灰を降らすが、これは雨水が火孔の中に堆積物を流しこんで、出口をふさぐからであろう。(1より7までは各火孔の番号、8中岳火口壁、9西火口外輪山、10東火口外輪山、11朝間山、12砂千里ヵ浜、13潮江谷、14行幸記念碑、15勅使ヵ原、16表登山道、17南登山道)。

中岳．丸山(高岳南面)上空より．ま下に瀬江谷の切れ目，砂千里ヵ浜をこえて，舟型の噴火口．1933年現在．第一噴火口のBが活動中である．

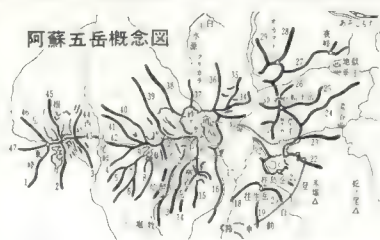
火口壁は切りたった絶壁．東北一帯は高く鋸歯のようなガレ③，西方一帯はやや低く齊一．西北部の第一火口は壁上から深さ 86 m①，途中でいったん廣いテラスとなって落ちこんでいる．テラスは幅の廣い処で約 30 m，まったくの火山灰泥濘．雨水が大陸にみるような原始谷そっくりのモデルを刻んでいる．噴煙が少ないのでさらにテラスの內側斜面を第一火口底に下る②．S 字に東を向く火口丘．そこに噴煙がゴウゴウと直立する．

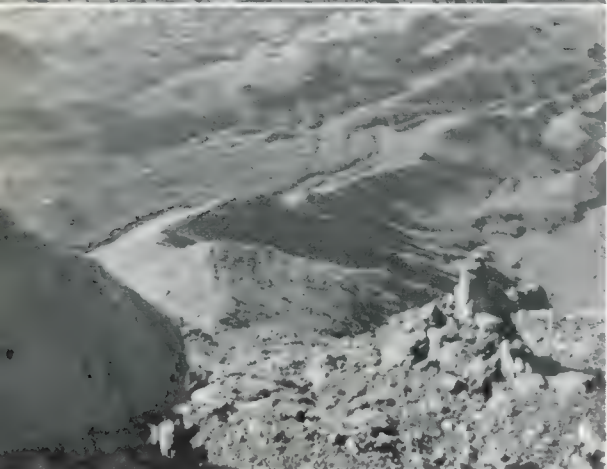
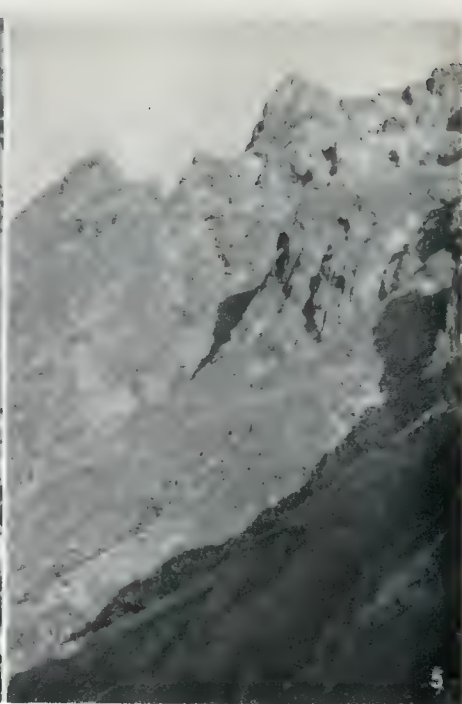
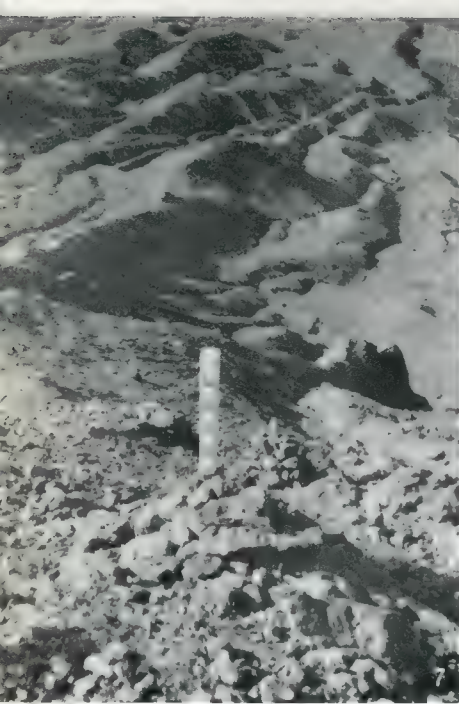
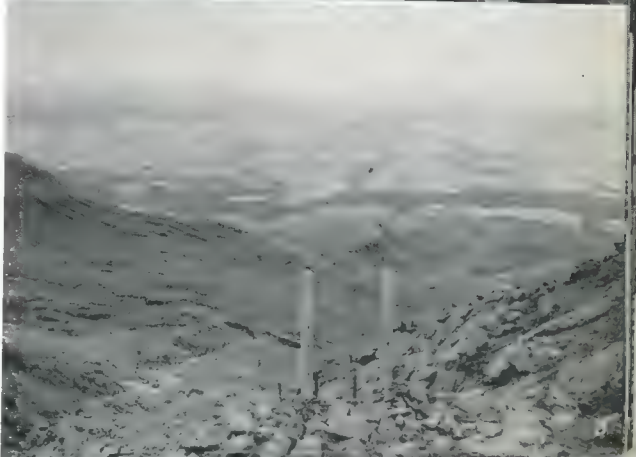
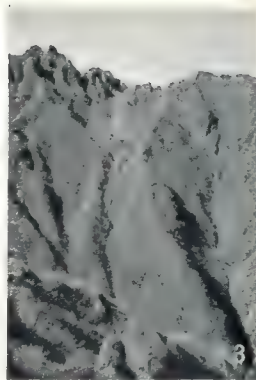
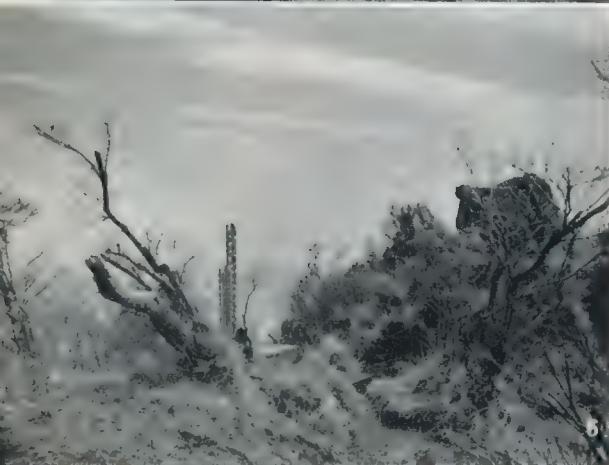
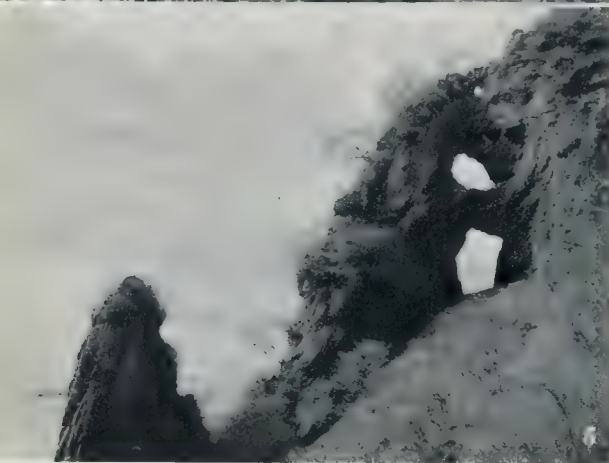
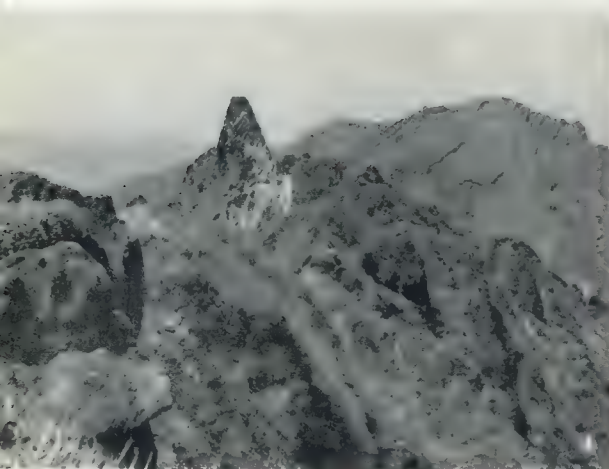
S 字に東を向く火口丘の形は草千里火口丘，蛇ノ尾などにも共通し，阿蘇の特長である．

ガ　　　　　ス

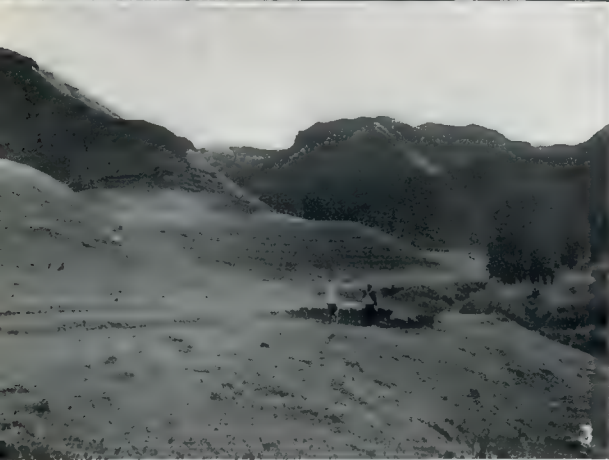
火孔から噴出する灰色の煙は，大部分が水蒸氣だが，亞硫酸ガスや硫化水素などのガスも多量に含み，また火山灰を混じて面を打つ④．この噴煙の灰色を中心にして，さらに崖からも火口底からも水蒸氣と亞硫酸ガスの数しれぬ，白い噴氣が錯綜する①．噴出口（硫氣孔）には黄色い硫黄がこびりつき，シュウシュウと鳴っている．かつて活動した第一火口B②も，現在では硫氣孔と化している見あげると，火口壁の東絶壁からも③，西絶壁からも④，白いガスの周期的な噴出　しかしこれは火口底から岩の裂目を傳ってきたもので，別にそこに口があるわけではない．この火口底も，昭和8年大噴火には⑤，熔岩のルツボと化し，火孔が噴いた火山灰は四國中國に達し，焦熱の熔岩片は木葉のように飛びちった．

鳴　　　　　　動

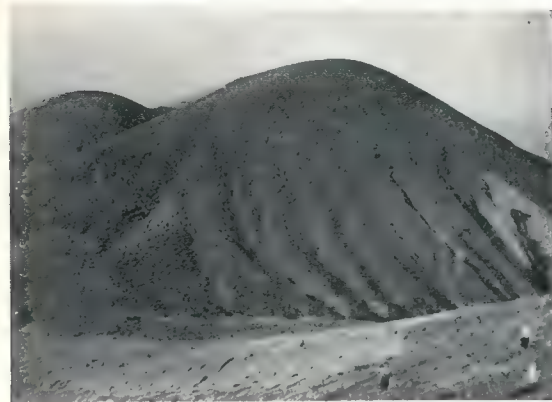
昭和8年大噴火の夜景④．焦熱の熔岩片は，仕掛花火のように光矢を放って火口の形が数十里の遠方から明らかに認められた．

一般てはまっ黒い噴煙を見ないと火山活動と思えないようだが，大噴火をひき起す活動源は，地表深くたえず鳴動をつづけている．火口底に立てはその振動が足もとから無氣味に感じられる．火山灰の泥濘に雨が刻んだ原始谷の線も，底からゆり動かされ，一夜にして內側にくずれこんでゆく①．火口丘に堆積した火山灰はたえず斜面をなだれ落ち②，火山灰の地面には細い龜裂か電光のように走ってゆく③．この無氣味な活動源は，ひじょうな深所からしだいしだいにせり上ってくるらしいが，深さ600m前後の場所で，周期0.5秒の振動を伴いながら活動をはじめると，噴火口から猛烈な噴出が見られるという．

三　阿蘇五岳

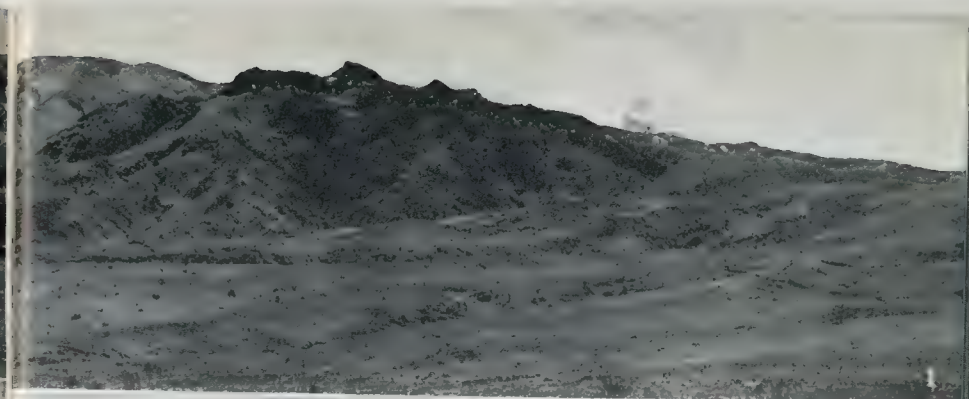
中央火口丘群は、俗に五岳とよばれている山々で代表される。五岳というのは、阿蘇神社から眺め得る五つの中央火口丘をいい、東から「猫岳に高岳楢尾烏帽子岳、杵島をそえて五岳とぞ見る」と指顧される。それらの山勢は、東西と南北との裂線に沿って、二方向に走り、火口もまたこの二線に沿って規則ただしく排列されている。南北の裂線の上には、オカマド山、烏帽子岳、往生岳、杵島岳などがならんでいるが、これらの山は中央火口丘の内でも初期に噴出したもので、一般に山体も火口も小さく、今やまったくその噴勢がたえている。一方、烏帽子岳を交叉点として、東西の裂線上にならぶのは、根子岳、高岳、楢尾岳、中岳などであるが、大部分は山体も高く、大きな火口をもっており、しかも今なおこの裂線上には、中岳の噴煙、湯ノ谷、栃木の温泉が、火山活動の余勢をもらしている。

①鏡山尾根　②長者ヵ谷尾根　③地藏尾根　④オゾ尾根　⑤ツベツキ東尾根　⑥ツベツキ西尾根　⑦松尾尾根　⑧虎ヵ峯尾根　⑨鷲ヵ峯（ナイフ・リッジ）⑩地獄谷　⑪仙酔尾根（南西に燕ヵ浄土尾根）⑫阿蘇乗越し尾根　⑬楢尾東尾根　⑭扇谷尾根　⑮楢尾西尾根　⑯硯ヵ石尾根⑰馬ノ背　⑱往生東尾根　⑲往生中尾根　⑳往生西尾根　㉑杵島西尾根第一　㉒杵島西尾根第二　㉓湯ノ谷北尾根　㉔湯ノ谷中尾根　㉕湯ノ谷南尾根　㉖烏帽子西尾根　㉗オカマト尾根㉘オカマド南尾根第一　㉙オカマド南尾根第二　㉚烏帽子東尾根　㉛草千里尾根　㉜杵島東尾根　㉝朝間山㉞皿山尾根　㉟楢山尾根　㊱楢山南尾根　㊲クリカラ尾根　㊳中松尾根　㊴丸山尾根　㊵高岳南尾根第一　㊶高岳南尾根第二　㊷高岳火野尾根　㊸根子岳火野尾根　㊹嫁ノ平尾根　㊺山口山尾根　㊻ワクト尾根　㊼根子岳東尾根

高　　　　　　　岳

①② 五岳の最高峯．その絶頂には大鍋とよぶ大爆裂火口がある．東西が約 400 m，南北約 100 m．塊状の熔岩流が，るいるいとして障壁をめぐらし一木一草もない熔岩世界．
③ 頂上北部にあたる水汲み谷の上に，ポツンとある岩小屋．しかも概して遭難の多い阿蘇山にただ一つの避難小屋である．
④ 立岩，高岳登頂は中岳 1,500 をよじり，立岩を目標に高岳三角点にとりつくのが一般的コース．
⑤ 燕ヵ浄土登り口．晴天なら登りやすいが，熔岩の斜面は長い．雪白の神馬（口碑に高岳に現われるという）の隠れ場所も見つからぬハダカの道．
⑥ 仙酔尾根（馬鹿尾根）．仙酔峡からここを経る道は一度登ってみるとよい．中腹から阿蘇谷を，頂上から 360 度景観を．阿蘇満喫は高岳登山にかぎる．

高　岳　熔　岩

① 仙酔尾根．かつて大鍋からあふれでた焦熱熔岩は，火を吹き舌うちしながら斜面を流れ下った．
② ドロドロの熔岩はやがて冷却し，ヒビ割れた．仙酔尾根に見るその岩塊．
③ 燕ヵ浄土尾根の急坂遭難碑．どこを見ても同じ熔岩ばかり．悪天候に逆って遭難した人も多い処，冬季は零下20度，3尺の積雪も珍らしくない．
⑤ 鷲ヵ峯．ナイフリッジともいう九州随一の岩場だが，一部に凝灰岩がまじり山肌はごくもろい．
⑥⑦ 高岳の熔岩はカルメラ状でない．かたく緻密で赤褐色の肌は高岳を3,000m級山岳に見せる．
④ 熔岩流の末端を表わす仙酔郷．ここには美しい池もあり，高岳クライマーのキャンプ場である．
④ 高岳の熔岩世界を色づけるものは，初夏に咲くミヤマキリシマの群落．

根　子　岳

① 高岳より根子岳．その境は火尾峠．根子の東西面にはやっと爆裂口らしきものを認めるが，全山いちじるしく浸蝕の進んだ集塊岩の累層．東方は裾野を外輪山上にひく．
② 根子岳東峯より高岳をふりかえる．手前には西尾根③の浸蝕谷．根子は五岳中でも珍しくハダカでない．一面ブッシュ．
④ ノコギリのようなシルエットが東西をきる稜線上には，天狗岩の熔岩塊がつっ立っている．根子とは石の多いという意．
⑤ 鏡岩．浸蝕作用が北部竿河原の岩障子に大穴をあけた．傳說では怏力無双の鬼八法師（きはちぼうし）が苦しまぎれにあけた．61 頁参照．
⑥ クサリでやっと登れる天狗岩のてっぺん．わずかに四坪余．クロモジ，ドウダン等の灌木を見る．

石　の　山

① 南郷谷から見た裏根子．いちじるしい放射谷．山腹はたえず崩壊をつづけて，道らしい道もなくつい明治の末まで登るものもいなかった．登れば帰れぬという口碑がある．
② 宮地から根子へ．坂梨牧場から箱石峠に向う途中．附近に芥神（あくたがみ）．火尾峠越えに疲れたわが娘をいたわりすぎて畜生道に落ちた士が，娘を手打ちにし自害したという口碑．
③ この道は坂梨牧きて妻子ヵ鼻の裾を通る．一本杉⑤附近の谷から東尾根にとりつき根子頂上へ．
④ 宮地町は二の御田より根子岳．根子は猫ともいい，人家で猫がいなくなれば修業のために根子岳に登ったとあきらめる．山には猫の王様が住んでいて，除夜の晩に猫の大会議が開催されるらしい．

往 生 岳，杵 島 岳

②は楢尾岳斜面から左に杵島（③は西面），右に往生（④は西面）の東面．杵島とは西の意で，往生は又の名を塁丸（どべん）．両者ともスコリア状に堆積した熔岩からなり，浸蝕作用も緩慢で，宿根草が繁茂するのでドベンのように丸い．頂上と東西斜面に火口跡．黒い肌は山焼の痕．

楢　尾　岳

①は楢尾岳の西面．右から中岳噴煙，楢尾岳，その背後に高岳，最左端に根子岳．楢尾岳はいちじるしく浸蝕が進み，山形はまるで破壊されているが，火口の遺跡らしいものは，いくつか認められる．その熔岩は日本火山中でも特長的なもの，赤褐色でしごく緻密である．

四　阿蘇文化

光、熱、岩、水、人の営みはたえずそれらの環境に支配される。阿蘇もまたその例外ではない。健磐龍命が外輪の一角をけやぶって火口湖干拓に成功して以來、阿蘇の中心人物となったのは、命の子孫として代々阿蘇神社の宮司を務め、國造を兼ねた阿蘇氏であった。阿蘇氏はつとめて外來文化をとりいれ、阿蘇國に多くのうるおいをもたらした。しかし阿蘇文化の性格を形造ったのは、いつも阿蘇という土地の環境であった。そしてその文化は、開拓の原動力であった農民たちの中に、素朴な形で残されてきた。米塚が貧民への放出米の一山だったという傳説も、開拓民の貧しい生活を表わすものとも考えられるし、魔神に対する自衛の武器庫矢村社は、必死の開拓の一齣を語っている。何物をも燒きつくす火山性の内に、もっとも尊いものは新しく生まれる生命であった。男女の性の営みが農民文化の根本をなし農民の慣習や傳説の内に、未だにその古代性を失わずに残っている。阿蘇には性的な傳説が純粋な形で語りつがれているし、礼婿という掠奪結婚的な押しかけ婿の慣習が、女の少ない山地で生命の尊さを強調している。また年禰神、乙姫神社に毎年おこなわれる離婚結婚の神儀は、閉ざされた天地で結婚の改良を計る切なる願いの表われに他ならぬだろう。

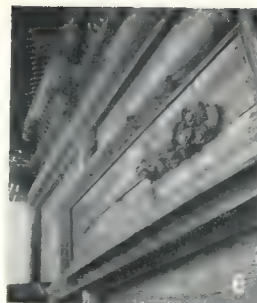
①　昔は湖水だった阿蘇谷．外輪斜面に根拠を構える部落．水田は中央に集まり，今でも浜という．
②　黒川を落す数鹿流滝．
③　蛇行いちじるしい黒川上流の鹿濱川．最近右側に改修の河道を通した．
④　宮地郊外東岳川．雨が降れば一時に流れる涸川．しかし地下には伏流があり低地で湧水を見る．

火，　地，　水

① ニエ塚西方にある千丁無田．なんど開拓民が入っても手に負えない湿原地が，何百町歩と続き湖水の痕跡を止めている．
② 宮地は一の御田に見た古い阿蘇農家．屋根に千木．壁土はないが冬になると牧草を周囲に積みあげ，家畜にやりながら迎春，夏は涼しい風通し．
③ 湯田．外輪内壁にわきでるぬるい温泉は，むかし沼沢地だった頃の生物分を含んで，そのまま寒地の肥料になるという．
④ 坊中や宮地一帯に噴ぬき井戸が多い．伏流がこんこんとわきでている．
⑤ 火山灰は土地ではヨナという．阿蘇谷にヨナが落ちれば雨，落ちなければ晴の環境が，阿蘇谷を文化の中心にしたのか．
⑥ 阿蘇谷は主に水田で畑は外輪五岳の裾にしかない．特産の玉蜀黍が昔の主食だった部落が多い．

1

2

3

文 化 の 芽 生 え

① 阿蘇谷の東北隅，小嵐山という外輪の裾には先住民族の古墳群が見られる．むかしこのあたりは湖水の波打ち際だった．
② 阿蘇文化は宮地を中心に芽ばえた．タテイワタツノ命（阿蘇大神）は神武天皇より阿蘇國鎮護を命ぜられ，宮居をトせんために弓を射，矢の落ちた場所を宮の地ときめた．
③ 阿蘇家．阿蘇國を支配した地方豪族の名は六國志，日本後紀等にも表われ，謡曲高砂にある阿蘇の神主友成も当家の人．
④ 阿蘇神社の楼門．孝霊天皇が大神の宮殿を修め大神と同妃アソツヒメノ命を祀ったという．楼門の宝劍額⑥は後の支那交通を示して唐様である
⑤ 平安朝時代の内裏の制を現在に傳える阿蘇神社社殿．ここの儀式には古い朝廷のしきたりがそのまま残っているという．

神　話　と　傳　説

① 國造神社．大神の長男ハヤミカタマノ命は父と一緒に阿蘇開拓に精だし，ここに鎮まり給うた．
② 藤谷神社．またの名を谷徳坊（たんとくぼう）．天狗を祀る厄よけ神．すなわち太平洋戦争中は徴兵よけの神様．
④ 年禰神（としのかみ）．旧暦の2月神様は姫神とここで離婚され，当年の役を終える．
③ 乙姫神社．離婚をすました神様は，この裏山で翌年の姫神と結婚する．神婚の終らないうちは人間の結婚儀は禁じられる．
⑤ 霜宮の火焼殿（ひたきや）．大神の矢取，鬼八法師は疲れたあまり足の指で矢を投げ返し激怒にふれ，鏡岩を破り矢部に逃げたが殺され，怨みの霜を降らせた．初秋の2ヵ月間，処女が殿にこもって火をたかないと霜が降るという．
⑥ 矢村社．大神が宮居を卜す矢を放った地，また矢の落ちた地ともいう．

3

4

5

6

農民の臭い

① 阿蘇谷は田，南郷谷は畑．南郷の中心は高森町．昔から日向にゆく要路だが鉄道は終点である．
② 高森町．火山灰地に営まれた集落．銀行の近代性にも開拓民的な臭い．
③ 阿蘇谷の東隅にある坂梨町．豊後往還の宿場町だったが，士族屋敷にただ参勤交代の昔を偲ぶ．
④ 漱石が二百十日をものした内ノ牧町．その家並はヨナに汚れたバラックで，タライ伏せといい，子を間引かねばいけなかった農民の苦衷を察する．
⑤ 宮地町．半士半農の開拓士族は格式ばった塀を設けた．谷にこもって排他的で，よそものからは在郷兵とののしられた．
⑥ 鬼熊，虎熊など熊の名が多いほど荒っぽい阿蘇人も50年來植林に努める．万物を焼きつくす火の國に新しい生命は尊い

1

2

岩波写真文庫目録

新刊

234

235

236

多くの峠がカルデラをかこんでいる。ここは東の高森峠、日向へぬける。阿蘇と他郷との交わりは、いずれかの峠を歩み、外輪を越えなければならなかった。